

エイジズムが高齢者の身体機能や健康習慣に及ぼす影響

介護予防マネジメントコース
5006A303-7 綾部 健三

研究指導教員：岡浩一朗助教授

1. 研究の背景と目的

2005 年 10 月現在、わが国の 65 歳以上の高齢者は総人口の 20%を超え、2015 年には総人口の約 26%に、2050 年には約 38%に達すると見込まれている。そして、2004 年現在、男性の平均寿命は 78.64 歳、女性のそれは 85.59 歳と世界一の長寿国となっている。

このように、先進国の中でも有数の高齢社会を実現している日本ではあるが、アメリカの老年医学者・Butler が、社会には特定の年齢集団に対する否定的、および肯定的な偏見や差別、それらに根ざした抑圧や排除があり、この特定の年齢集団に対する敵意的な考え方や行動をエイジズム(Ageism)と呼んだように、わが国においても、年齢や老いに対する差別や偏見、否定的なステレオタイプがある。

本研究は、心身機能の低下の著しい人とそうではない人とがいるのは、日常的に発せられる老いや年齢に対する偏見、ステレオタイプの見方による情報の受け止めなどに違いがあるからではないのか。また、エイジズムの受け止め方によって、体力や健康習慣に違いがあるのではないのか。それらは、性や年齢、世帯構造、教育歴、仕事・家事の頻度、ボランティア活動の有無、健康情報への関心度、自立心、親しい仲間やロールモデルの有無、幸福感などとも関連しているのではないのかなどを仮説に、高齢者用エイジズムセルフチェック票を開発し、エイジズム度の関連要因を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法、調査対象

東京都 I 市主催の「介護予防大会」に参加した高齢者に対して、エイジズムの影響をどの程度受けているのかを明かにする目的で、「動機づけ、学習」、「生理的側

2) エイジズム度と人口統計学的情報との関連

男性と女性とでは、誤答数にほとんど差はなかった。ま

面」、「感情・情動」、「社会的側面」、「効率性・適応性」の5つにカテゴリー化した 19 項目の設問から成るエイジズムチェック票を用意した。被検者にはこの各項目が正しいと思う場合には「はい」と、正しくないと思う場合には「いいえ」と答えてもらい、その誤答数が多い人ほどエイジズムの影響が強いと判定する。そして、この誤答数が「開眼片足立ち」、「5m歩行」、「膝伸展力」の結果、および各高齢者の属性と関わりがあるかどうかをみた。

3. 結果と考察

1) 高齢者のエイジズム度

高齢者用エイジズムセルフチェック票の 19 項目に対する 25 名(男性 2 名、女性 23 名)の誤答数の平均は 7.1 で、その誤答率は 37.05%であった。最も誤答数の少なかったのは、64 歳の女性で「2」、最も誤答数が多かったのは、69、83、85 歳の女性で「12」であった。

被検者全体で最も誤答率の高かったのは、「高齢者は、若い人ほど効率よく働けない」の 80%で、次いで、「車を運転する高齢者の事故率は 10 代、20 代の若者の事故率よりも低い」で 76%であった。

また、最も誤答率が低かったのは「およそ 8 割の高齢者は健康で、ふつうの生活を送るのに差し支えない」で 4%、次いで「高齢者は、何か新しいことを学ぶのに時間がかかる」の 16%であった。

さらに、これらをカテゴリー別にみると、「動機づけ、学習」は 24%、「生理的側面」は 54.7%、「感情・情動」が 25%、「社会的側面」が 29.3%、「効率性・適応性」が 62.7%で、「効率性・適応性」と「生理的側面」の設問に対する誤答率が高かった。これは、特にマスコミからステレオタイプの情報が流され、それを高齢者が無批判的に受け入れている可能性があるからだと推察される。た 64 歳から 74 歳の誤答数は 6.8 で、75 歳以上の高齢者は 7.7 であった。仕事・家事を「ほぼ毎日する」、「週

に 3~4 日する」人の誤答数は 7.7、「週1日以下する」人が 5.4 であり、ボランティア活動をしている人が 6.2、していない人は 7.7 で、趣味活動を一緒にする仲間がいる人は 7.0 で、いない人は 8.5 であった。さらに、「現在よりも昔のほうが幸せだったと思うことがある」人の誤答数は 8.8 であったのに対して、それ以外の人は 6.7 であった。

t 検定の結果、「仕事・家事を週に1日以下する」人が、それ以外の人よりも誤答数が少なく、エイジズムの関与している可能性のあることが推察された。これは、加齢とともに、仕事や家事よりも他のことを優先することで生活の適応を図っているからだとも推測される。しかし、ボランティア活動の有無や幸福感とエイジズムとは有意な傾向はみられなかった。さらに、世帯や教育歴の違いによるエイジズムの影響もみることはできなかった。

3) エイジズムと体力

① 開眼片足立ち

25 名の平均は 37 秒 3(SD=23.35)で、中央値の 50 秒 00 秒よりも長い被検者と短い被検者の二群に分けてエイジズムとの関係を t 検定でみると、記録の長短とセルフチェック票の誤答数とはほとんど関係していないことがわかった。

② 5m歩行時間

25 名の平均は 2 秒 7(SD=0.95)で、中央値の 2 秒 4 よりも短い被検者と長い被検者との二群に分けてみると、前者の誤答数は 6.1 で、後者のそれは 8.3 であった。t

検定の結果からもタイムの違いによって誤答数に有意な傾向のあることが明らかになり、歩行の速い・遅いがエイジズムに関わっていることが示唆された。

③ 膝伸展力

24 名の平均は 201.2N(SD=50.76)であり、その中央値 199.5N よりも低い被検者と高い被検者との二群に分けてみると、統計学上からは記録の高低とエイジズムとは関係していないことが明らかになった。

4. 結論

被検者数が少なかったこと、しかも被検者は I 市主催のイベントに自主的に参加した、日ごろから健康情報に関心が高く、趣味仲間もいて、ボランティア活動を行っている活動的な高齢者が多かったことが、仮説とは異なる結果がもたらされた可能性がある。しかし、以下の二点が明らかになったことは今後の研究にとっても意義のあるものとなった。

- 1) エイジズムセルフチェック票の誤答数は、仕事や家事を「ほぼ毎日している人」と「週に 3~4 日行っている人」よりも、「週に 1 日以下の人」のほうが少なく、仕事・家事とエイジズムとが関与している可能性のあることが推察された。
- 2) エイジズムセルフチェック票と 5m歩行時間との結果から、誤答数の多い人ほど歩行時間が遅いというように、エイジズムが歩行時間に関与している可能性のあることが明らかになった。